

エフレムの祝文

主吾が生命の主宰や怠惰と愁悶と陵駕
と空談の情を我に與ふる勿れ。貞操と
謙遜と忍耐と愛の情を我爾の僕(婢)
に與へ給へ。嗚呼主王や我に我が罪を見
我が兄弟を議せざるを賜へよ。蓋爾は
世々に崇讃めらる「アミン」
神や我罪人を浄め給へ 十二次
主吾が生命の云々

常に福

常に福にして全く玷なき生神女 吾
が神の母なる爾を 福なりと稱ふるは
眞に當れり ヘルウイムより尊くセラ
フイムに並びなく榮え 貞操を壊らずし
て神言を生みし 實の生神女たる 爾を
崇讃む

爾は爾の審断に義にして爾の裁判に公なり
夫れ我は不法に於て妊まれ我が母は罪に於て我
を生めり夫れ爾は心に眞實のあるを愛し我が
衷に於て智慧を我に顯せり「イソプ」を以て我
に沃げよ然せば我潔くならん我を滌えよ然せ
ば我雪より白くならん我に喜びと樂とを聞か
し給へよ然せば爾に折られし骨は欣ばん爾の
顔を我が罪より避け我が蓋くの不法を抹し
給へ神や清潔き心を我に造り正直き靈を我の
衷に改め給へ我を爾の顔より逐うこと勿れ
爾の聖神を我より取り取り上ぐること勿れ爾が救
ひの喜を我に還し主宰たるの神を以て我を
固め給へ我不法の者に爾の道を教へん不度の者

は爾に歸らんとす神や我が救ひの神や我を血よ
り救ひ給へ然せば我が舌は爾の義を讃揚げん主
や我が唇を啓けよ然せば我が口は爾の讚美を
揚げんとす蓋爾は祭を欲せず欲すれば我之を
獻らん爾は燔祭を喜ばず神に喜ばるゝの
祭は痛悔の靈なり痛悔して謙遜なるの心は
神や爾輕じ給はず主や爾の恵に因て恩をシ
オンに垂れイエルサリムの城垣を建て給へ其の
時に爾義の祭献物と燔祭とを喜び饗けん其
の時に人々爾の祭壇に犢を奠えんとす。

天の王

天てんの王おうなぐさむる者ものや眞實しんじつの神しん在あらざる所ところ
なき者もの満みたざる所ところなき者ものや萬全ばんぜんの寶藏ほうぞう
なる者もの生命せいめいを賜たまふの主しゆや來きたりて我等われらの中うち
に居おり我等われらを諸々もろもろの穢けがれより潔いさぎよくせ
よ至善者しぜんしやや我等われらの靈たましいを救すくひ給たまへ

天主經

天てんに在います我等われらの父ちちや願ねがはくは爾なんぢの名なは聖せい
とせられ爾なんぢの國くには來きたり爾なんぢの旨むねは天てんに
行おこなはるるが如ごとく地ちにも行おこなはれん我が日にち

用ようの糧かてを今日こんにち我等われらに與あたへ給たまへ我等われらに債おひめ
ある者ものを我等われら免ゆるすが如ごとく我等われらの債おひめを免ゆる
し給たまへ我等われらを誘いざなひに導みちびかず猶なおわれら
凶惡きようあくより救すくひ給たまへ。蓋けだ國くにと權能けんのうと光榮こうえい
は爾なんぢに世世よよに歸きす。「アミン」

第五十聖詠

神かみや爾なんぢの大おほいなる憐あはれに因よりて我われを憐あはれみ爾なんぢが
恵めぐみの多おほきに因よりて我われの不法ふほうを抹けし給たまへ屢々しばしば我われを我われ
が不法ふほうより洗あらい我われを我われが罪つみより清きよめ給たまへ蓋けだ我われは
我が不法ふほうを知る我われの罪つみは常つねに我が前まえに在あり我われは
爾なんぢ獨ひとり爾なんぢに罪つみを犯おかし惡あくを爾なんぢの目めの前まえに行おこなへり

信經

我信ず 一の神父全能者 天と地見ゆると
 見えざる萬物を造りし主を。又信ず 一の
 の主 イイスス ハリストス 神の獨生の子
 萬世の前に 父より生まれ 光よりの光
 眞の神よりの 眞の神 生まれし者にて 造
 られしに非ず 父と一体にして 萬物彼に
 造られ 我等人々の為 又我等の救の為に
 天より降り 聖神及び童貞女マリヤより
 身を籍り 人と為り 我等の為に ポンテイ
 イピラトの時 十字架に釘うたれ 苦し
 みを受け 葬られ 第三日に 聖書に叶うて

復活し 天に 升り 父の 右に 坐し 光榮を 顕
 して 生ける 者と 死せし 者を 審判する 為に
 還た 來り その 國終り なからんを。又信
 ず 聖神 主生命を 施す 者 父より 出で 父
 及び 子と共に 拝まれ 讃められ 預言者を
 以て 嘗て 言いしを。又信ず 一の 聖なる
 公なる 使徒の 教會を。我認む 一の
 洗禮 以て 罪の 赦を得るを。我望む 死者
 の 復活 並に 來世の 生命を。「アミン」